

# 月刊 ウィーン

## GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊32年目 **Nr. 378**

**2021年5月号**



# 杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 111

高レベル放射性廃棄物の処分地選定に向けた文献調査が行われている北海道寿都町(すつちょう)で、四月一四日、地元住民らが意見交換を行う「対話の場」がインターネット中継で実施された。

処分事業実施主体の原子力発電環境整備機構は、昨秋からの寿都町・神恵内村での文献調査開始を受け、地層処分技術・安全性を含む事業内容や文献調査の実施状況、地域の産業に及ぼす効果やリスクなどを幅広く示し、地域の発展ビジョンについて議論してもらえよう、「対話の場」を設置すべく自治体との調整を行ってきた。



<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/7618.html>

熟知するよう学習会が行われるべき」といった町の姿勢に対する不信感の声も出席者からあった。「対話の場」は一日に神恵内村(かまえないむら)でも行われた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な物理学者(その四)を紹介したい。ヴィクトール・フランツ・ヘスは、一八八三年オーストリアのシュタイアマルク州ベツガウの近郊で生まれた。一九一〇年にグラーツ大学で学位を得て、ウィーン大学などで放射線の研究を行った。当時検電器に蓄えられた電荷が自然放電するのは、地球内部からの放射線によるものと考えられていたが、一九二二年、ヘスらは気球に乗って五キロまでの高度と放射線の強さの関係を測定した。上空に行くほど放射線強度が増加することを見出して、放射線が宇宙起源であることを示した。この功績で一九三六年のノーベル物理学賞を受賞した。一九一九年からグラーツ大学の非常勤教授、数年アメリカで研究した後一九二五年にグラーツ大学の常勤教授、一九三一年にインスブルック大学教授になったが、ナチスの台頭を嫌い、一九三八年にアメリカへ渡ってニューヨークのフォード大学の教授となった。一九四四年にアメリカの市民権を得ている。

論を活性化させていた。英語が大の苦手、ノーベル賞受賞講演も通訳付きで日本語でしたのは有名。東京大学原子核研究所助教授、京都大学基礎物理学研究所教授、同所長、京都産業大学教授、名古屋大学特別教授、同素粒子宇宙起源研究機構長などを歴任した。

余談であるが、人類が毎日浴びている宇宙放射線発見者ヘスのことを筆者は最近まで知らなかった。大学の三回生時は、益川助手(当時)から物理学演習を習った。複雑な物理定数群のオーダーを一瞬で暗算するには驚嘆した。学生が変な答を出す、「とんでもない。ぶん、歩けば十分」などのジョークを連発した。これ位しか覚えてない出来の悪い学生であったが、今月も両市出身の偉大な物理学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたウィーン大学にあるノーベル賞受賞者顔写真インスタレーション(左端がヘス)を掲載させていた。

一方、一九四〇年に名古屋市に生まれた益川敏英京都大学名誉教授は、名古屋大学理学部で坂田昌一研究室に所属し理学博士号を取得。京都大学理学部の助手であった一九七三年に、坂田研の後輩である小林誠とともに、素粒子物理学における弱い相互作用について、当時三つしか存在が知られていなかったクォーク(電荷1/3の基本粒子)に関し、それが六種類あると仮定することにより、当時知られていた荷電ハリテイ対称性の破れという現象に説明を与えた。この理論の正しさはのちの実験で確認され、二〇〇八年、小林・益川理論による物理学への貢献によりノーベル物理学賞を受賞した。学生時代から「いちやまんの益川」と呼ばれたほどの議論好きで、違った視点や仮説を提起して議



■杉本純 元京都大学教授 原子力機構ウィーン事務所長

杉本純の原子力の話 II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています : <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>



ウィーン医科大学 MedUni Wien はプレジジョン・メディシンのための研究所を新設する。オーストリア首相、学術大臣、学長が4月26日に会見発表した。オーストリア連邦教育学術研究省は欧州委員会「ヨーロッパ・レジリエンスとリカバリのファシリティ」の資金から2026年までに合計7500万ユーロを投資する。研究センターはAKHキャンパスに建設される。

ウィーン総合病院AKH・医大キャンパス(上写真)は数年前から開発を重ねてきた。現在建設中のトランスレーショナル・メディシンのためのセンター、テクノロジー・トランスファー・センターなどが新たに加わる。ポストコロナを見据えた最先端技術の精密医療研究センターが、新型コロナ危機後のヨーロッパ回復再建の一環として資金を得て、研究員400人規模で、更に加わる。

